

クリンアズマシロカネソウの和名を与えたい。

Dichocarpum nipponicum (Franch.) W.T. Wang & P.K.Hsiao

forma **didymocalyx** H.Ohba, f. nov.

A typo extus numero 9 vel 10 sepalis petaloideis et intus 4 vel 5 petalis nectariferis divergenti.

Type: Japonia. Honshu: Tochigi Praefecto in pago Nagusakamimachi. 2 Apilibus 2000. Tokuro Matsuzawa s.n. (TI).

This form has flowers with double (9 or 10) petaloid sepals and 4 or 5 nectariferous petals. (東京大学総合研究博物館)

九州で発見されたオオヤマザクラとその分類 (大場秀章^a・斉藤政美^b)

Hideaki OHBA^a and Masami SAITO^b: A New Variety of *Cerasus sargentii* (Rehder) H.Ohba Found at Mt. Shiraiwa-yama, Miyazaki Prefecture, Kyushu, the Southern Limit of Distribution of the Species

熊本県境に近い宮崎県の五ヶ瀬町と椎葉村とにまたがる白岩山群のひとつ向坂山で、地元の秋本 治氏により、オオヤマザクラ *Cerasus sargentii* (Rehder) H.Ohba が発見された。白岩山群は九州山地に属する石灰岩の露出する霧立山塊の一部で、岩場には九州では分布が限られるヤハズハハコ、ウスユキソウ、イワギク、ホタルサイコなどの好石灰岩植物が見られる。問題のサクラは向坂山の石灰岩層が堆積した崖錘斜面に約10株あり、最大の株は胸高直径約30cm、樹高約20mであった。その後の調査で白岩山群の北東の日之影町(宮崎県)でも見出され、発見された総株数はおおよそ50になる。

このサクラは、芽鱗が粘り、花に総花柄がなく、しかも無毛であり、新葉は深い紅色となり、成葉裏面は白色を帯びず、樹皮にはやや光沢があり、横一列に皮目が密に並ぶなどの点から、オオヤマザクラの変異に含まれることは明らかである。これまで九州からはオオヤマザクラの報告がなく、四国の石鎚山から飛んでその南限産地となる。

しかし、このサクラは花柄が長さ3.5cmにも達すること、萼筒が筒状で、萼裂片が針状三角形、鋭頭になること、花卉の基部が楔状となることなど、他地域のオオヤマザクラには見出せない傾向をもっており、変種として区別することを提案したい。白岩山群は絶滅が危惧される植物が多く、秋本氏を中心とした地元も方々がその保全に力を注いでいる。今回、桜研究家の佐野藤右衛門氏を交え、こ

のサクラの和名を検討していただいた。その結果をもとにキリタチヤマザクラという和名を用いたい。このサクラを命名するに当たり、ご援助を得た秋本 治氏をはじめとする「霧立越の歴史と自然を考える会」の皆様にお礼を申し上げる。

Cerasus sargentii (Rehder) H.Ohba in J. Jpn. Bot. 67: 279 (1992).

var. **akimotoi** H.Ohba & Mas.Saito, var. nov.

A typo pedicellis ad 3.5 cm longis, calycis tubo cylindrico, lobis subulati-triangularibus apice acutis et petalis basi cuneatis bene differt.

Holotypus. Japan. Kyushu. Miyazaki Pref.: Nishiusuki-gun, Gokase-machi, Mt. Shiraiwa-yama, alt. 1580 m. On calcareous steep slope. Masami Saito & Osamu Akimoto s.n. May 9, 1999 (TI, Isotypes in A, TI, TNS, Museum and Cultural Institution of Miyazaki Prefecture).

Paratypes. Japan. Kyushu. Miyazaki Pref.: Higashiusuki-gun, Shiiba-mura, Mt. Mukouzaka-yama, alt. 1530 m. On calcareous steep slope. May 5, 1999. Saito & Akimoto s.n. (TI); loc. cit. May 2, 1999. Osamu Akimoto s.n. (TI); loc. cit., July 10, 1999, lv. Saito & Akimoto s.n. (TI); loc. cit., May 8, 2000. Saito & Akimoto s.n. (TI); Miyazaki Pref., Nishiusuki-gun, Gokase-machi, Mt. Shiraiwa-yama, alt. 1320 m. May 9, 2000. Saito &

Akimoto s.n. (TI). loc. cit., alt. 1410 m. May 9, 1999. Saito & Akimoto s.n. (TI); loc. cit., alt. 1600 m. May 9, 1999. Saito & Akimoto s.n. (TI).

Cerasus sargentii ranges from Sakhalin, Ussuri to Korean Peninsula and Japan (Hokkaido, Honshu and Shikoku). In 1999 Mr. Osamu Akimoto found this flower cherry at Mt. Mukouzaka-yama in the Shiraiwa-yama Mountain Group in the central mountainous region of Miyazaki Prefecture in Kyushu. The flower cherry belongs to *Cerasus sargentii* having sticky bud scales, glabrous inflorescences without peduncles, reddish leaves when sprout, gloss barks with numerous lenticels standing side by side densely. This locality is the southern limit of

the species. Comparing with the type variety it differs by a different combinations of several characters: the pedicels are long, up to 3.5 cm long, the calyx has a cylindrical tube and acute tipped, subulate-triangular lobes, and the petals have a cuneate base. By these different tendencies it is regarded as a new variety. Var. *akimotoi* is proposed here. The epithet is dedicated to Mr. Osamu Akimoto, who has found this flower cherry and made effort to conserve the nature and its biodiversity of the mountainous range named Kiritachigoe including Mt. Shiraiwa-yama, the type locality of the flower cherry.

(*東京大学総合研究博物館,
*宮崎県総合博物館)

タイワンチドメグサ九州で発見 (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: *Hydrocotyle pseudoconferta* Masam. Newly Found in Kyushu

東京都世田谷区下駒沢町上馬引沢で書店を経営していた小川佐七氏は、父から引き継いだ標本の充実をはかるため、小川植物研究所を設立し、大正10年頃から昭和8年頃まで、初期は自身で、大正14年頃からは、齊藤四郎次氏、近藤金吾氏などを採集家として雇い、日本全国の標本を収集した。場所は台湾、九州から千島、サハリンに及び、約20万点以上の標本を集めた。しかし、研究者がいなかったため、十分に利用されずにいたが、昭和8年頃、原 寛氏に寄贈され、氏の没後、この標本は総て東大に入れられた。この標本を整理したところ、オオバヒルギが大隅半島の伊座敷で採集されていたり、エゾノタチツボスミレが三重県の熊野川流域で採集されていたり、今まで知られていなかった新しい地域を示すものがある。このなかで日本新産のものを一種類紹介する。

九州の五島列島の福江島で、変わったチドメグサ属の植物が採集されている (Fig. 1)。調べたところ、台湾とフィリピンに分布するタイワンチドメグサ *Hydrocotyle pseudoconferta* Masam. であることがわかった。全

体はチドメグサ *H. sibthorpioides* Lam. に似ているが、茎や葉柄に毛が密に生えているので異なる (Fig. 2)。毛の点ではケチドメグサ *H. dichondroides* Makino に類似するが、葉がより大きいことや花序が太く短いことなどから容易に区別できる。

本種は、葉がずっと小さいけれど、オオバチドメグサ *H. javanica* Thunb. に近縁である。オオバチドメグサが琉球に見られず、台湾から九州にとぶことも類似する。最近の台湾の著書ではタイワンチドメグサとオオバチドメグサを同種として扱っている。しかし、タイワンチドメグサは茎や葉柄にやや開出した下向きの毛が密生し、葉柄は長さ0.7-2 (-5) cm、葉身は長さ幅とも0.7-3 cmで、一般に葉身は葉柄と同長かやや長い。オオバチドメグサは茎や葉柄は無毛か、下方に寝た短い毛がまばらに生え、葉柄は茎の下部で長さ6-20 cm、上部で0.7-4 cmあり、一般に葉柄は葉身の2-3倍で基部の葉では5倍ほどにもなる。オオバチドメグサは東南アジアに広く分布しているので、タイワンチドメグサが同種であるなら、この形のものも広く見られても